

【研究ノート】

スポーツ活動における 参加条件と運動意欲の関係

石 倉 忠 夫

1 諸 言

文部科学省がすすめるスポーツタウン構想や総合型地域スポーツクラブに対する公共事業は、スポーツマーケティングによって効果的に推進されるといわれている。また、民間企業では、ゴルフや水泳のようなスクールビジネスやレッスンビジネス、フィットネスクラブのようなクラブビジネスにおいて、生徒数や会員数を増やし継続させるためのスポーツマーケティング調査が展開されている。

スポーツ活動は個人の任意の活動であるため、スポーツへの支出は任意のものである。このためスポーツ消費行動は「選択財の消費行動」としての性格を持ち、その消費市場は一般経済状況の変化の影響を受けやすい領域となっている。よって、スポーツの習慣化の程度が消費行動の安定化に強く影響するとされている(中澤, 1999)。Mullin ら(1993)によると、スポーツ消費行動に関わる影響要因は個人的要因と環境的要因からなり、これらが相互に作用することで消費者の意志決定が成立すると説明している。個人的要因は身体特性、学習・知覚・動機・態度、ライフスタイルやファミリーライフサイクル、自己概念によって構成される。一方、環境要因は仲間・家族・コーチ・教師などその人にとって重要な人物、気候的・地理的条件、スポーツ企業の市場行動、価値・規範、人種・ジェンダー、階級構造によって構成される。スポーツ消費者はこれらの要因の相互作用を受け、ニーズの認知、情報収集、選択肢の評価、購買・

利用の決定、購買・利用の経験、経験の評価、経験の評価後の行動（強化）というフィードバック連鎖を含むプロセスを経て意志決定をし、その結果として一連のスポーツ消費行動が現れる。

Weiss ら（1992）はスポーツに参加する動機づけに関する先行研究をレビューした結果、（1）新たなスキルを習得したり向上させるため、（2）身体をシェイプアップしたり強化するため、（3）友人と一緒にいるためや新たな友人を得るため、（4）グループやチームの一員であることを実感するため、（5）試合で勝ったり成功するため、（6）興奮や挑戦・活動など楽しさを体験するため、などの理由に分類できるとしている。また、これらの要求を満たすために複数からの理由が重なって参加することも明らかにしている。一方、スポーツに参加しない理由として Goodrick ら（1984）が検討した結果、仕事や家事が忙しくて「時間がない」、「疲れている」、「施設がない」などの理由が多く認められることを報告している。我が国においては（総理府、1994）、一般成人において運動やスポーツを行った理由として「楽しみや気晴らし」（68.4%）、「健康・体力づくり」（50.7%）、「友人・仲間との交流」（44.9%）が上位を占めている。一方、運動を行わなかった理由については、「仕事が忙しくて時間がないから」は約半数の者があげ、常に1位となってきた。続いて「場所や施設がないから」「指導者がいないから」「機会がなかったから」「仲間がいないから」「金がかかるから」も指摘され続けている。

これらの結果から、スポーツへの参加者と非参加者との間には時間的條件や施設の条件などにさほどの差異はないと思われるが、スポーツに参加する意志の違いがどこから生じてくるのか不明な点が指摘されよう。

そこで本調査では、「するスポーツ」への参加条件を考察する一助として、スポーツ活動の環境的要因としての参加条件と個人的要因としての運動意欲との関係を検討することを目的とした。

2 方 法

調査対象者：289名(男性200名,女性86名,不明3名)。内訳は社会人66名(22.8%),学生215名(74.4%),無職5名(1.7%),不明3名(1.0%)であった。また,平均年齢は 25.7 ± 11.4 歳(男性: 27.3 ± 12.6 歳,女性: 22.0 ± 6.4 歳)であった。

調査項目：調査項目は資料1,資料2に示すとおりである。なお,問1にあげた優先条件は大学生(50名)を対象に行った自由記述形式による予備調査の結果をもとにもっとも多くあげられた条件から5つの項目を採用し,一対比較法の項目として用いた。

また,運動意欲調査は猪俣ら(1988)の作成した調査項目を取り上げた。運動意欲調査は6つの尺度で構成され,それぞれの尺度で得点が高いほど強く感じていると評価される。

運動に対する自信に関する「運動有能感」

運動場面における協同や協力に関する「親和欲求」

運動に関する活動欲求である「活動欲求」

運動場面における競争に関する「競争欲求」

運動に対する失敗や不安に関する「運動不安」

体育や運動を行うことによって得られる価値に関する「運動価値感」

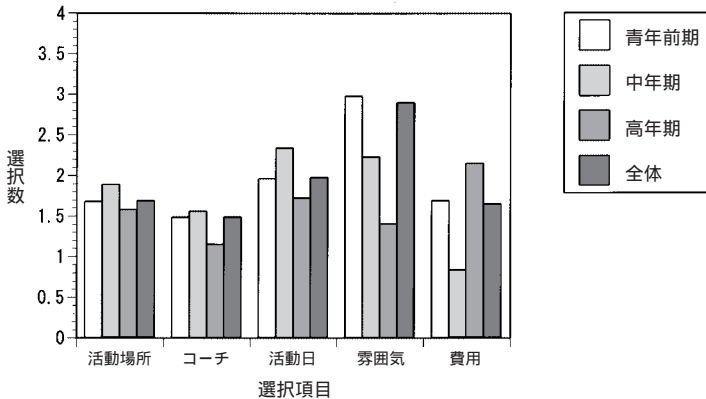
なお,分析にあたり統計ソフトSPSS for Windows ver.11.0Jを用いた。

3 結果と考察

3.1 調査対象者の特徴

優先する参加条件については,全体を対象として分析した結果,雰囲気(2.9/10),活動日(2.0/10),活動場所(1.7/10),費用(1.6/10),コーチの条件(1.5/10)の優先順位がみられた。男女別では,両者とも雰囲気,活動日の順で多かったが,3番目には男性は活動場所,女性は費用を多くあげていた。

また、年齢層を青年前期（18-45歳，264名）、中年期（46-65歳，18名）そして高年期（66歳以上，7名）に分けて優先する参加条件について検討した結果（第1図）、青年前期は雰囲気 活動日 費用 場所 コーチ、中年期は活動日 雰囲気 場所 コーチ 費用、高年期では費用 活動日 場所 雰囲気 コーチの順でポイントが優先していた。



第1図 各年齢層における優先項目選択数

全体的には活動集団の雰囲気や活動日をより重要な条件として優先していることが伺える。しかし、年齢層別にみると青年前期と中年期は雰囲気と活動日をより重要視しているのに対し、高年期では雰囲気よりも費用の方を最優先していることが特徴として示された。青年前期は活動日や活動に必要な費用の面を優先して考慮しつつも活動集団の雰囲気を最優先させており、この年齢層は集団成員の一人としてそのスポーツを楽しもうとする傾向が強いものと考えられる。また、中年期は活動日をもっとも優先させ、活動集団の雰囲気や活動場所をやや重視している。この結果は、仕事や家事などの時間的制約のなかでスポーツを楽しむ雰囲気を味わいたく、そして活動場所への移動時間をあまり割きたくないという傾向にあるといえよう。高年期は費用、活動日そして場所の

順で優先させており、他の年齢層よりも活動集団に参加する物理的条件を重視しているものと考えられる。

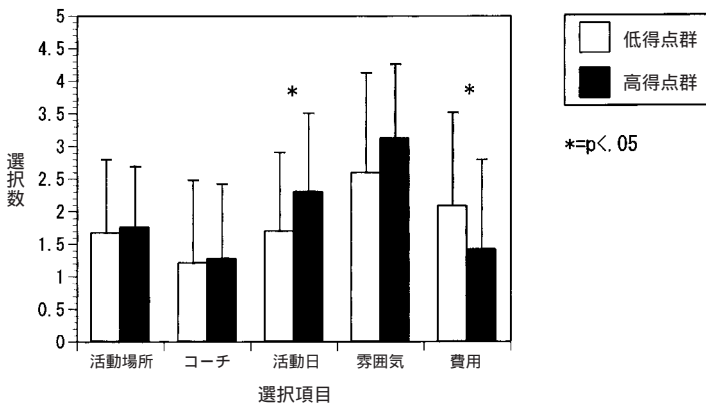
その他の質問項目について 1 要因分散分析にて検討した。被調査者全体の傾向として、実施施設(練習場所)まで移動に要する時間の限界の平均は 43.18 ± 18.91 分。趣味や娯楽に使える金額は 18.55 ± 13.83 千円で、そのうちスポーツ活動に使える金額は 7.66 ± 6.79 千円。一週間あたりのスポーツ活動回数は 2.90 ± 1.71 回で一回あたりの時間は 2.62 ± 1.26 時間が限界であった。また、男女差について検討したところスポーツ活動に使える金額に有意差が認められ ($f=5.15$, $df=1/267$, $p=.024$)、男性は 8.29 ± 7.00 千円、女性は 6.25 ± 6.19 千円が使える金額であった。年齢層別では趣味や娯楽に使える金額 ($f=7.45$, $df=2/267$, $p=.001$)、スポーツ活動に使える金額 ($f=20.44$, $df=2/269$, $p=.000$)、一週間あたりのスポーツ活動回数 ($f=4.45$, $df=2/270$, $p=.013$) に有意差が認められた。多重比較の結果、趣味や娯楽に使える金額では中年期がもっとも多く (29.53 ± 18.49 千円)、青年前期がもっとも少なかった (17.57 ± 12.99 千円)。スポーツ活動に使える金額は高年期 (17.57 ± 10.78 千円)、中年期 (14.39 ± 10.99 千円)そして青年前期 (6.89 ± 5.74 千円)の順で多かった。一週間あたりのスポーツ活動回数は青年前期で 2.99 ± 1.73 回でもっとも多く、中年期は 1.83 ± 1.15 回でもっとも少なかった。趣味や娯楽に使える金額のうち、スポーツ活動に使える金額の占める割合において有意差が認められた ($f=3.02$, $df=2/265$, $p=.050$)。多重比較の結果、高年期で 82.5 ± 56.1 %でもっとも多く、青年前期が 45.7 ± 39.5 %でもっとも少なかった。

これらの傾向から、青年前期は一週間あたりのスポーツ活動回数は多いが、そこで費やすことのできる金額が他の年齢層よりも少ないため、金銭的条件が悪いといえよう。中年期は趣味や娯楽で使える金額は多いもののスポーツ活動が少ないため、スポーツ活動を行える時間的条件が悪い。高年期ではスポーツに費やす金額の割合が高いにもかかわらず、スポーツ活動の回数が青年前期よりも少ないため、スポーツ活動一回あたりに費やす金額が高いといえよう。

3.2 運動意欲各尺度との関係

運動意欲各尺度の得点を算出し、平均値と標準偏差から青年前期(264名)、中年期(18名)、高年期(7名)それぞれの年齢層における高得点群、中得点群、低得点群に分類し、高得点群と低得点群との比較を各質問項目で行った。分析にあたり1要因分散分析を用いた。

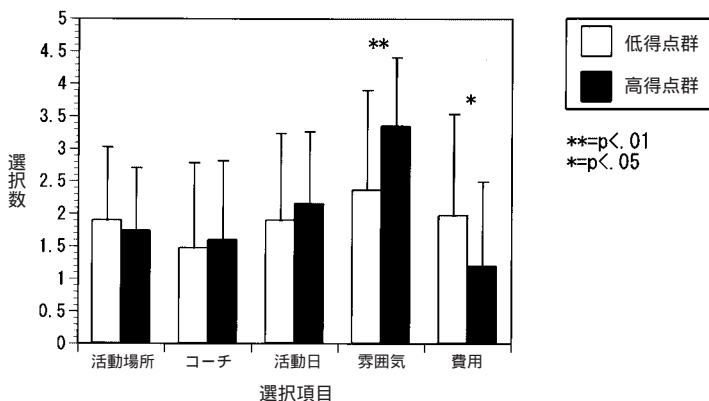
<運動有能感>高得点群44名、低得点群39名であった。一週間あたりのスポーツ活動回数($f=18.17$, $df=1/80$, $p=.000$)と趣味や娯楽に使える金額のうちスポーツ活動に使える金額の割合($f=7.80$, $df=1/79$, $p=.007$)、そして優先条件では活動日($f=5.10$, $df=1/81$, $p=.027$)と費用($f=4.63$, $df=1/81$, $p=.034$)に有意差が認められた。優先する参加条件(第2図-1)で、活動日において高得点者群が低得点者群よりも高く優先し、費用においては低得点者群の方がより高く優先している。つまり、運動に自信のある人は自信のない人よりも活動日を優先させ、費用をあまり優先していないといえる。一週間あたりのスポーツ活動の限界回数は高得点者群の方がより多く、趣味や娯楽で使えるお金のうちでスポーツ活動に使える割合も多かった。運動に自信のある人はスポーツ活動をより多く実施することが可能であると判断し、趣味や娯楽で使えるお金のうちそこで費やされる費用の割合もより多いということである。



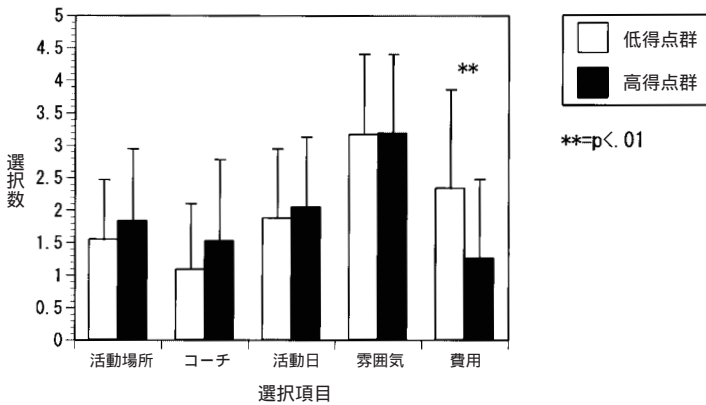
第2図-1 運動有能感尺度における高得点群と低得点群の選択数

<親和欲求> 高得点群 70名, 低得点群 28名であった。一週間あたりのスポーツ活動回数 ($f = 5.41, df = 1 / 90, p = .022$) と時間 ($f = 5.61, df = 1 / 93, p = .020$), 優先条件では雰囲気 ($f = 13.12, df = 1 / 96, p = .000$) と費用 ($f = 6.27, df = 1 / 96, p = .014$) に有意差が認められた。優先する参加条件(第2図-2)では高得点者群が低得点者群よりも雰囲気を優先させ、費用は低得点者群の方が優先させていた。運動場面での協同や協力に対する欲求が強い人はその欲求が弱い人に比べて雰囲気を優先させており、費用はあまり優先させていないということになる。また、スポーツ活動実施場所までの移動時間の限界と一週間あたりのスポーツ活動回数の限界は高得点者群の方が高く、この協同や協力に対する欲求の強い人は弱い人に比べて移動時間の限界が長く、そしてスポーツ活動も多くできるものと考えられよう。

<活動欲求> 高得点群 71名, 低得点群 24名であった。一週間あたりのスポーツ活動回数 ($f = 10.83, df = 1 / 91, p = .001$) とスポーツ活動に使える金額 ($f = 4.80, df = 1 / 90, p = .031$), 趣味や娯楽に使える金額のうちのスポーツ活動に使える金額の割合 ($f = 7.64, df = 1 / 88, p = .007$), そして優先条件では費用 ($f = 12.25, df = 1 / 93,$



第2図-2 親和欲求尺度における高得点群と低得点群の選択数



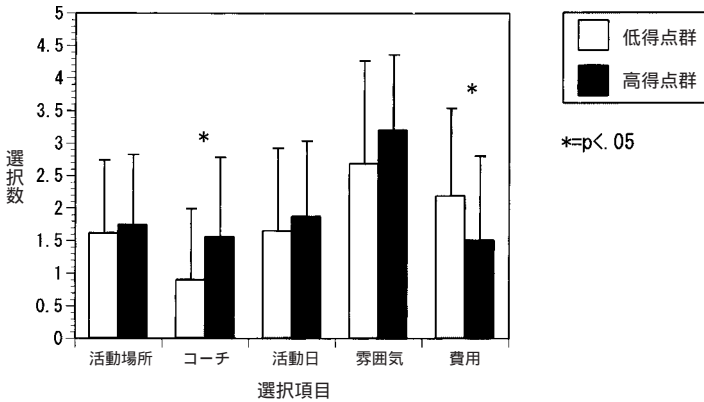
第2図-3 活動欲求尺度における高得点群と低得点群の選択数

$p = .001$) に有意差が認められた。優先条件(第2図-3)において低得点者群は高得点者群よりも費用の条件を優先させており、活動欲求の低い人は高い人に比べて費用を優先する傾向にある。一週間あたりのスポーツ活動回数の限界は高得点者群の方が高く、スポーツ活動に使える金額と趣味や娯楽で使えるお金のうちでスポーツ活動に使える割合も多かった。活動欲求の高い人は低い人よりもスポーツ活動がより頻繁に行えると判断し、スポーツに使えるお金の割合も高いといえよう。

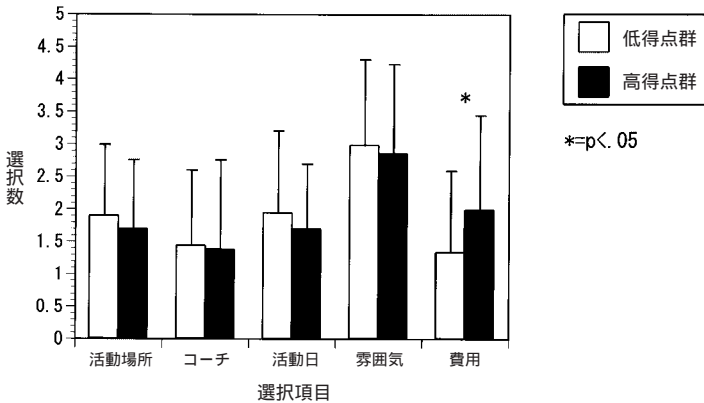
<競争欲求>高得点群 80名、低得点群 28名であった。一週間あたりのスポーツ活動回数 ($f = 17.78$, $df = 1 / 101$, $p = .000$)、コーチの条件 ($f = 6.23$, $df = 1 / 106$, $p = .014$) と費用の条件 ($f = 5.50$, $df = 1 / 106$, $p = .021$) で有意差が認められた。第2図-4に示すように高得点者群は低得点者群よりもコーチの条件を優先させ、低得点者群は高得点者群よりも費用の条件を優先させていた。競争欲求の高い人は低い人よりもコーチの条件を優先させ、そして費用はあまり優先させていないといえる。一週間あたりのスポーツ活動回数の限界は高得点者群の方が高く、競争欲求の高い人はスポーツ活動をより頻繁に行えると判断しているとい

える。

<運動不安>高得点群51名, 低得点群46名であった。一週間あたりのスポーツ活動回数 ($f = 8.59, df = 1 / 90, p = .004$), 費用の条件 ($f = 5.49, df = 1 / 95, p = .021$) で有意差が認められた。第2図-5に示すように高得点者群は低得点者群よりも費用の条件を優先させており, 運動不安の高い者は低い者よりも費用の条件を



第2図-4 競争欲求尺度における高得点群と低得点群の選択数

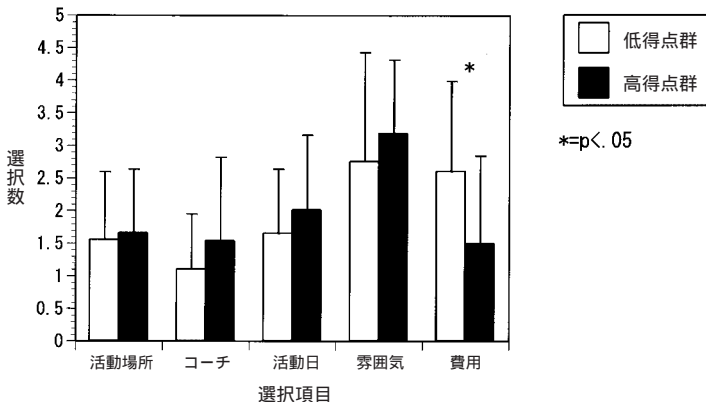


第2図-5 運動不安尺度における高得点群と低得点群の選択数

優先して判断しているものと考えられる。また、一週間あたりのスポーツ活動回数の限界は低得点者群の方が高く、運動不安の低い者は高い者よりもスポーツ活動を頻繁に行えると判断しているといえる。

<運動価値感> 高得点群 98名, 低得点群 20名であった。費用の条件 ($f=11.03$, $df=1/116$, $p=.001$) で有意差が認められた。低得点者群は高得点者群よりも費用の条件を優先させており(第2図-6), 運動に対する価値感の低い者は高い者よりも費用の条件を優先的に判断基準としてあげているものといえる。

これらの結果から、全体として「雰囲気」を最優先条件として位置づけているが、運動意欲の低い者(ネガティブな意欲)は「雰囲気」の次に「費用」の条件を判断材料として優先している傾向がみられる。一方、運動意欲の高い者(ポジティブな意欲)は一週間のうちスポーツ活動を行える回数と趣味や娯楽で使えるお金に対するスポーツ活動で使えるお金の割合が高いという特徴が示された。当然のことながら、運動意欲の高い者はスポーツへの参加意欲が高く、そこで費やされる金額も多く支払うことができるといえる。また、運動に自信のある者は「活動日」を、仲間との協力や協同する欲求の高い者は「雰囲気」を、運動場面における競争する欲求の高い者は「コーチ」の条件を各尺度の低



第2図-6 運動価値感尺度における高得点群と低得点群の選択数

得点者よりも優先させているという特徴がみられた。

今回の調査は、スポーツ活動の環境的要因としての参加条件と個人的要因としての運動意欲との関係を検討することを目的とした。調査結果は次の3点にまとめられる。

全体的には活動集団の「雰囲気」や「活動日」をもっとも重要な条件として優先している。しかし、高年期では「雰囲気」よりも「費用」の方を優先している。

運動意欲の低い者は「雰囲気」の次に「費用」の条件を判断材料として優先している。

運動に自信のある者は「活動日」を、仲間との協力や協同する欲求の高い者は「雰囲気」を、競争欲求の高い者は「コーチ」の条件を各尺度の低得点者よりも優先させている。

これらの結果から、年齢層や運動意欲などの個人的要因が環境的要因としての参加条件と関連しているといえる。しかしながら、本調査ではあるスポーツ種目の活動に参加するという想定で優先する条件を質問しているため、もともと運動意欲の低い者が今回の調査結果を参考に企画したスポーツ活動に参加するという可能性は低いものと考えられる。つまり、運動意欲の低い者はスポーツ活動に関わる費用を活動条件として優先的に考慮し、かつ趣味娯楽に対して支払われる割合も低いため、日常生活におけるスポーツ活動の価値がかなり低いと推察されるからである。この点で運動意欲の低い者がスポーツ活動に参加する環境要因と個人的要因について検討の余地が残されたといえる。また、本調査の被調査者のサンプル数が少なかったため、各年齢層における検討が十分に行えなかったことも問題点の一つとしてあげられる。

資料2

それぞれの質問に対し、適切だと思われるところを塗りつぶして (●) ください。

項目番号	よくあてまはる	ややあてまはる	あまりあてまはらない	まったくあてまはらない
1 私は運動はじょうずだと思う。	○	○	○	○
2 私は、他の人と競争をするとき、いつも勝ちたいと思う。	○	○	○	○
3 私は、運動している途中でうまくいかなかったとき、もうだめだと思ってしまうことが多い。	○	○	○	○
4 私は、素早く動くことができる方である。	○	○	○	○
5 私は、運動する時間が待ちどおしい。	○	○	○	○
6 私は、運動では他の人よりじょうずになりたい。	○	○	○	○
7 私は、運動が自分にとって、大事なことだと思えば思うほど、うまくいなくなってしまふ。	○	○	○	○
8 運動では、友達といっそう仲よくできる機会が持てる。	○	○	○	○
9 私は、たくみにじょうずに運動できる。	○	○	○	○
10 私は、いつも運動したいと思っている。	○	○	○	○
11 私は、運動でみんなと力をあわせることが好きだ。	○	○	○	○
12 私は、運動でゲームをするとき、楽しむだけでなく、勝ちたいと思う。	○	○	○	○
13 運動はたくさん仲間をつくる。	○	○	○	○
14 私は、運動には自信がある。	○	○	○	○
15 私は、毎日一回は運動したくなる。	○	○	○	○
16 運動は、健康な身体をつくるのに大切である。	○	○	○	○
17 私は、運動で仲間のみんなよりうまくなりたい。	○	○	○	○
18 私は、やっている運動がうまくできないと、すぐあきらめる。	○	○	○	○
19 運動クラブ等では、良い友達がたくさんできる。	○	○	○	○
20 運動は大切な勉強である。	○	○	○	○
21 私は、運動するとき、誰かに嫌なことを言われるのではないかとびくびくする。	○	○	○	○
22 運動はいろいろ自分のために役立つ。	○	○	○	○
23 運動は老化防止に役立つと思う。	○	○	○	○
24 私は、運動のことを考えるとうきうきした気持ちになる。	○	○	○	○

ご協力ありがとうございました

【参考文献】

- Goodrick, G.K., Hartung, G.H., Warren, D.R. & Hoepfel, J.A., (1984) " Helping adults to stay physically fit: Preventing relapse following aerobic exercise training, " *Journal of Physical Education, Recreation and Dance*, 55 (2), pp. 48-49 .
- 猪俣公宏, 猪俣春世, 小林 稔, 伊藤友記, 高橋裕史, (1988) 「老年期における運動意欲の測定に関する研究」昭和 63年度文部省科学研究費 (一般研究 C) 研究成果報告書 .
- 総理府, (1994) 体力・スポーツに関する世論調査 .
- 中澤 眞, (1999) 「スポーツ消費市場と消費行動」, 池田 勝, 宇能信次編 『講座・スポーツの社会科学 3 スポーツの経営学』杏林書院, pp. 15-34 .
- Mullin, B.J., Hardy, S., & Sutton, W.A., (1993) *Sport Marketing*. Human Kinetics, Champaign, IL, pp. 72-73, pp. 79 .
- Weiss, M.R. & Chaumeton, N., (1992) Motivational Orientations in sport. In T. S. Horn (Ed.), *Advances in sport psychology*. Human Kinetics Publishers, pp. 61-99 .